付 章　薬師寺南大門及び中門の発掘

1 序　　言

本調査は平城京薬師寺伽藍の全規模を明らかにする第一段階であるが，同時に南大門と六条大路との関係を追及し，伽藍の中軸線を明らかにすることによって，平城京条坊研究の重要な資料を得る目的を持ってなされたものである。このことは「大安寺南大門及び中門の発掘[1)]」にも記したとおりである。

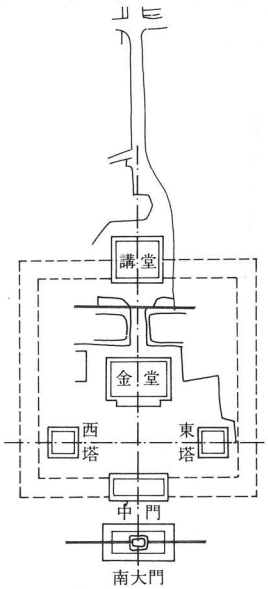
発掘の結果，現南門両袖の築地位置は動いておらず，南大門の位置も亦現南門と中心を合わせていることが判ったが，南大門中門共その大きさは，薬師寺縁起の記載寸尺に基いて従来考えられていたものとは全く異なり，はるかに大きい規模を持つものであることが明らかにされ，尚旧地表は現地表下2.5ないし5.5尺下にあって，南大門並に中門基壇上面はあまりひどく削りとられておらず，したがって旧礎石位置等もほぼこれを推知し得たのであった。

本研究は文部省科学研究費によったものであり，発掘は主として浅野清が担当し，奈良国立文化財研究所建造物研究室並に考古学研究室の協力を受けた。同研究所の杉山信三，田中一郎，鈴木嘉吉の三氏および実測を助けた東京大学工学部建築学科大学院学生沢村仁君の労ならびに薬師寺の多大な御好意に対し，深甚の謝意を表すものである。

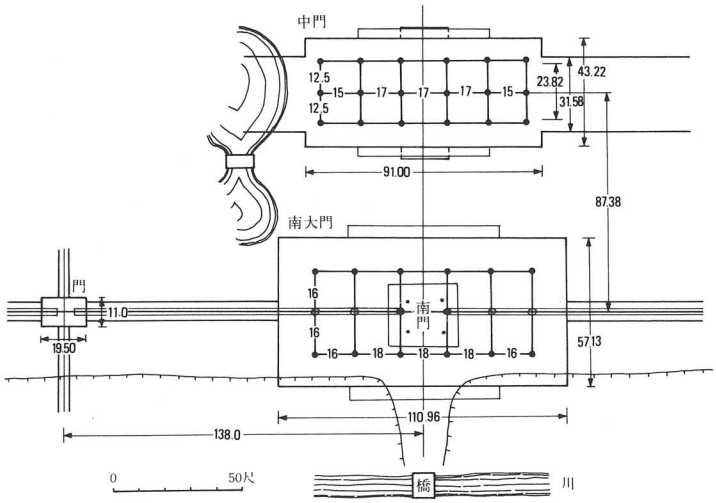
2 発 掘 の 経 過

本発掘は昭和29年8月27日に着手，9月27日に終了，同30日に埋立を了った。あいにく台風期に際会したため，日数の割合には仕事がはかどらなかった。

手掛りには南大門と中門の中間と考えられる所に南北のトレンチを入れた。上部に置き土である砂層があり，その下は粘土質の瓦を混じた埋立土となり，最下に土器片を多量に包含した



第1図



第2図

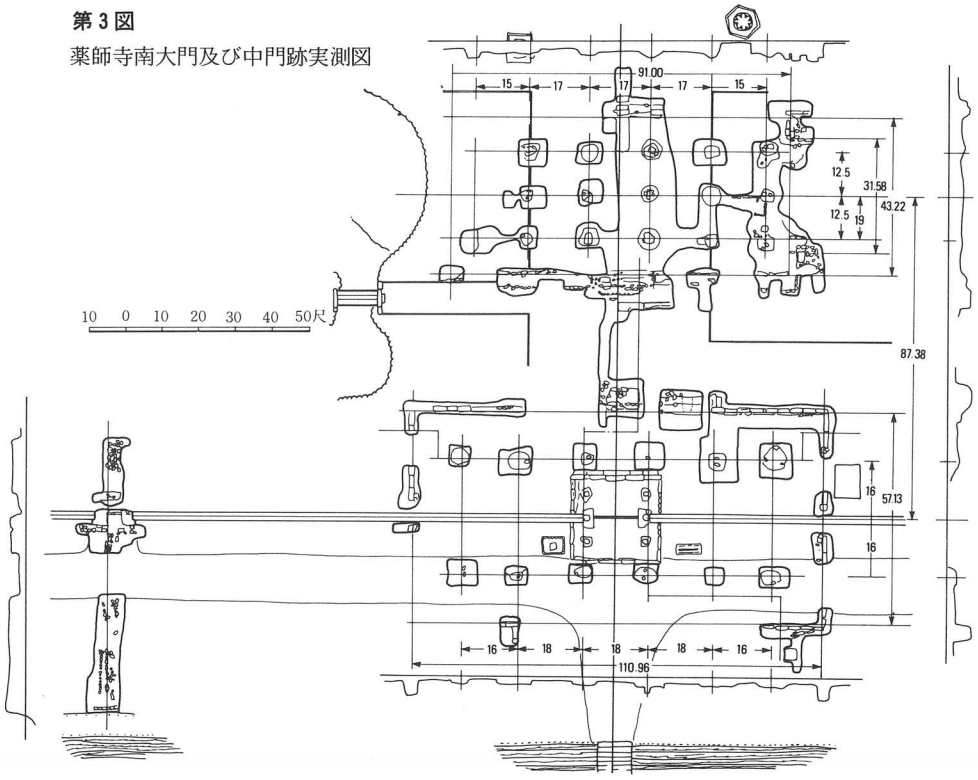
1）編者注　大岡実・浅野清・村田治郎・杉山信三・福山敏男・鈴木嘉吉「大安寺南大門，中門及び回廊の発掘」（『日本建築学会論文集』50号昭和30年3月）

埋土の層が二段あり，下の層の上には薄い粘土層が作られていた。これらの層中にも瓦片を含んでいる。その下は固い，表面に砂利を混じた粘土層となった。これをまず北方に掘りすすめると，床面上に花崗岩の玉石が出，中段と表土直下に凝灰岩片が現れ，ついで瓦が丁寧に積上げられている部分に達した。この瓦中には奈良時代の文様のある軒平瓦や軒丸瓦を含み，すべて下方の土器包含層中に入り，この上には粘土層がきて，さらに上方の土器包含層が重っていた。これを除くと，その下から東西にのびる玉石列（第9図）や凝灰岩の布石が見出され，土器包含土を取去ると，少し北方に後退して粘土層のみの壇側が現れた。なおこれより北方の地盤では，表土を除くと凝灰岩片が一面に散乱しており，これが中門旧地表の敷石の名残かと相像された。

一方トレンチを南方へ進めたが，ここでは大安寺の場合と異なり，建物基壇内の土築の構造がいわゆる版築ではなく，粘土を固めたもので，層状にもならず，固さもあまり固くないので，壇端を見分けるのが容易でなかった。然しやがて床面に凝灰岩片が現れ，次いで又現れ，付近には凝灰岩片が嵌入しており，この辺で土器包含層が絶えており，これより北方では瓦を含んだ層が土器包含層の上に重っておるのに対し，南方は清浄な粘土となる。よってここを階段の裾と見て，東方へトレンチを進めていくと，斜に下る粘土層の表面に凝灰岩が所々にのっていて，推定の誤らないことが判った（第4図）。これで大体南大門と中門の一角に取付いたのであるが，中門の方に後世の改修が多く加っていたためと，今一つは縁起の記載寸尺の中，桁行寸尺が全く誤っていたため，尚全貌の見当づけられるまでには，かなりの曲折を見なければならなかった。今一つの困難は大安寺の場合よりも樹木が要所に密生していて，思うように掘進められないことで，それが調査を非常に面倒にした。

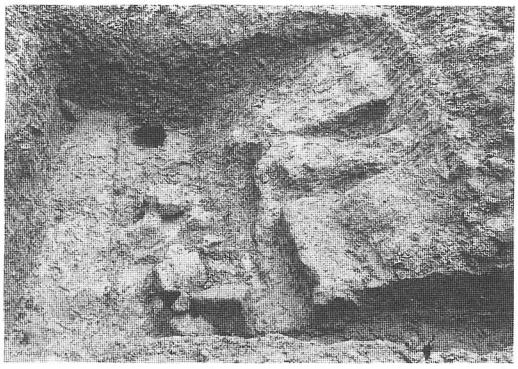
先ず南大門の発掘経過を記そう。南大門北側階段跡らしいものに手掛りがついたので，これを東方へ掘拡げる。表面の所々に凝灰岩片が付着した粘土の稍固い層が斜面状に北へ下り，壇

第3図
薬師寺南大門及び中門跡実測図

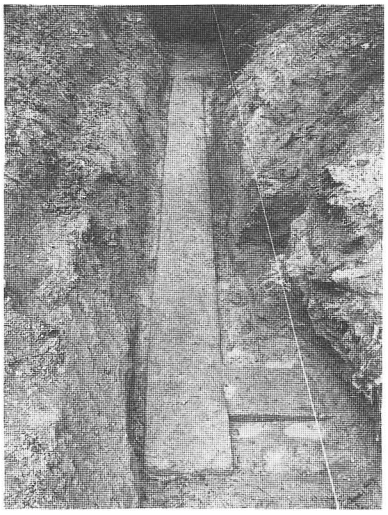


の尽きる当りで床面が稍下り，又北方で上る。この部分には凝灰岩片が散乱しており，布石の据えられた跡と見られる。最初縁起に記す寸尺に引かれて，門の桁行を狭く予想して，東北，西北の隅を捜したのであるが，布石が更に東西に長く延びて門が予想より遙かに大きくなることが判って来た。西方では端で布石がなくなったが，南折した部分が現れて先ず西北隅が決まり，次に階段の東端の，次いで西端の北方へ突出する布石が現れ（第5図）最後に東北隅が出た。隅の折れ曲り部分を少し出しておいてから，間を少し飛ばして，築地際を掘る。東側築地際では，布石の内方上に地覆石の端が載っているのを発見。その南面は欠損しており，残ったのは断片であるが，位置は動いた形跡なく，布石とも南端は綺麗に切られており，基壇が築地際で終っていたことが察せられた。したがって築地も亦旧位置を保っていることが知られる訳である。地覆が現れたのはこれが初めで，これによって，今まで見出されていた布石は，地覆の外下に来るものであることが明らかになった。なおこれらの布石や地覆の南端から少し北へ戻った当りを境にして土質が変り，南方築地際のものは美しく，北方のものは汚い。この南方の粘土層は層位を明瞭に見せないが，西側築地際では布石の上面から3尺程上まで存在しており，或は旧築地の土が残ったのかも知れない。西側築地際では地覆の端に，束石まで残されていた（第6図）。

こうして築地内側に於ける南大門基壇石の状況が判ったので，壇上で礎石据付跡を捜し始める。階段両端の耳石の通りは，常識的に見て端から二つ目の礎石位置に当るはずなので，広く表土を剝いで，東側の同所付近をしらべる。この付近は最近まで交番詰所になっていたので，漆喰敲き等が現れたが，これらを除き，その下の赤い粘土をのけると，清浄で均一な粘土となり，極く浅いくぼみが出来，その中から2個の玉石が現れた。大安寺南大門同様表土が多く削られているため，礎石下詰石はこの程度しか出ないのであろう。次にはこれと西方の階段耳石の通りとの間を3分した地点をさがす。先の西隣の位置では，最近の修理の際の足場柱をいけた穴が出たのみ。ここは礎石が薄かったのであろうか。その西隣では多少くぼみが出き，4個の石が出た。西の階段耳石の通りでも小さい石が3～4個出た。更に東西両端礎石跡を掘ったが，東方では始め小範囲のくぼみと根石らしいものが1個現われたのみ。（後に更に掘拡げて，周辺から3～4個の石が出た。）東端では多少小石が出たのみで，はっきりした手掛りは得られなかった。



第4図　南大門北側階段跡

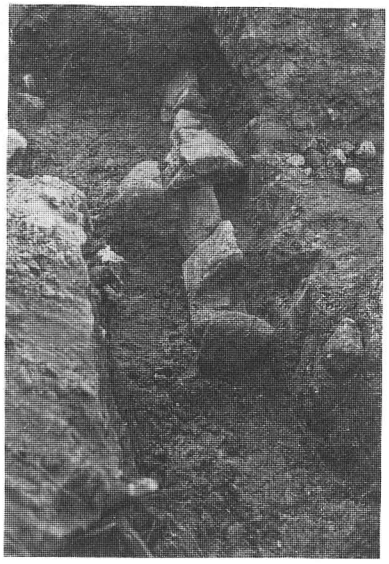


第5図　南大門北側階段より西方の基壇布石を見る

これで南大門の北半を定めることができたので，その全貌も推知し得られるに至ったわけだが，念のため，築地の南方も要所だけ掘ってみることとした。先ず東方で南側基壇の端をさぐり，兼ねて旧道路との関係を求めるため，折返しの位置をねらって道路の南の畠中に南北のトレンチを入れた。すると表土下に清浄な粘土の天然層が現れ，地下3尺以上に及んでも異常を呈しない。余りに不思議なので，場所を変え，東側基壇石の直上に当る所を掘ってみたが，今度は粘土層の下から砂層が出て，その下がまた粘土層となり，天然層の続く情況は同じであった。よって先のトレンチ内の一部を思い切って壺掘してみると，地下3尺8，9寸に至って瓦其他を含んだ黒っぽい土層が現れ，次いで焼土層を経て，濃鼠色の瓦を少量混じた砂交り粘土層となり，更に黒っぽい粘土層となった。そしてこれらの人工層の中から凝灰岩の列が現れたが，これは据りが悪く，位置も稍高過ぎるので，その前後を掘下げてみると，尚前後に瓦が含まれていて壇外と見られたので，北方へすすむと，遂に東西に続く凝灰岩布石に達した。ついでこれをたどって東南隅を出した。別に東西側の基壇の築地際を掘った所，東側では布石の内側に地覆石の北端部と，その上に載った束石が現れ，東側でも同様布石，地覆石及び束石の断片が旧位置を保ったまま出た。東側の束は略完存しているらしく，その上方に凝灰岩の崩壊したものが認められたのは，或は葛石の残存かも知れない。この他南面階段西端の耳石の位置を掘った所，予定の如く布石の折れ曲り角が整然と現れた。尚先に東方で，基壇南端をさぐる際旧道路面に向って入れたトレンチをたどって行くと，砂層と粘土層の交互になった天然層下から，瓦を含んだ鼠色の汚い土が現れ，布石の上端位の高さから瓦が減じ，色も薄くなって砂をまし，床面の如く固い層となり，布石下端から稍下る位で薄黒い粘土層となる。これが地山らしい。この粘土層を追って南へ進む布石内面から5，6尺程来て，掘立柱穴の如きものに出会う。ここでは地山の層の高さに瓦を多く含み（この瓦片の中には新しいものを含まず，すべて布目を持つ。）掘って行くと，周囲の粘土と異った砂と粘土のまじった土になっている。東と南の壁はかなりはっきりしているが，西と北は稍おさえ難く，瓦を含んだ土のなくなるのを目当てに大きさを略測するに約3.3尺角，深さは1.3尺位であった。この穴の相手はこれ以上追求しなかった。

最後に道路上で，南列柱礎石据付跡を掘る。北列を折返しにして位置を予定し，掘ってみる

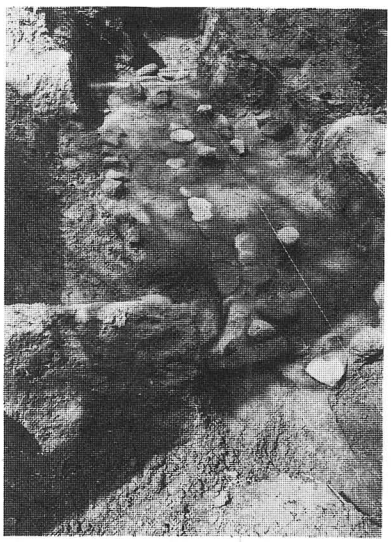
第6図　南大門西側築地脇出土の地覆及び束石



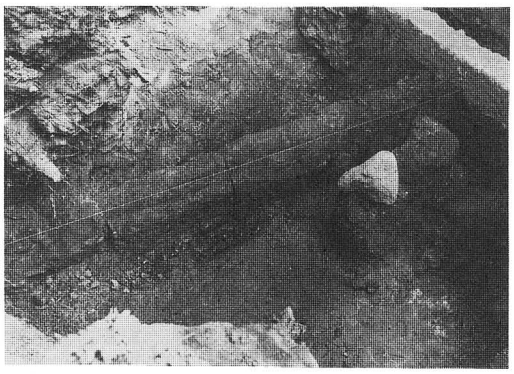
第7図　中門南側基壇石（西方階段耳石らしいものを見る）

と，東より第２のものは手答えなく，東端，東より第３のものはかなりよく根石を残し，その他は僅少の小石を見たのみであった。中列は丁度築地下になるので，調査不能であった。

中門は，前面階段が２次或は３次の改造を受けているらしく，凝灰岩の基壇石乃至階段石の他に花崗岩の玉石からなる石列が中央柱間分の階段下と思われる部分に出た他に前面雨落より南方の位置には東西に続く玉石列が出ている（第９図）。階段下の玉石の下には尚凝灰岩の布石が出ていて，階段踏石の名残かと思われた（第10図）。この基壇石は南大門のものとは全然異なり，地覆とか，その外の布石と見られるものは出ないで，凝灰石が立並べられているに過ぎない（第７図，第８図）。そしてその上には下がくずれて下ってはいるが或は葛石そのものと見られるものの存していた部分もあった（第７図）。又南面中央３間の西端に当る位置に階段耳石の残片かと見られるものも残っていた（同図）。西方は中古池にされて中門に関するものは殆ど失われたらしく，西端柱から西には遺跡を見出し得なかった。よって東方で中門と回廊の取付部を明らかにする必要があり，折重なる障害物を避けてトレンチを入れた所，丁度急所に当ると思われる箇所に楓樹があって作業が困難なため，これを取除き，漸くにして，中門基壇東南隅と回廊取付部分を抉出することができた（第11図）。但しここで回廊基壇の葛石と見られるものが最初北方で発見され，その南方には溝とその上の凝灰岩の蓋が現われると予想したのであったが，この南方のものも遂に回廊基壇の側石であることが判り，中門東側基壇石の北端の仕事



第９図　中門南側中央間の玉石列



第８図　中門南側基壇石（東方階段耳石附近に当る所）

第10図　中門南側中央間玉石列下から出た凝灰岩布石

第11図　中門東南隅（左上）より回廊取付部付近に亘る基壇石

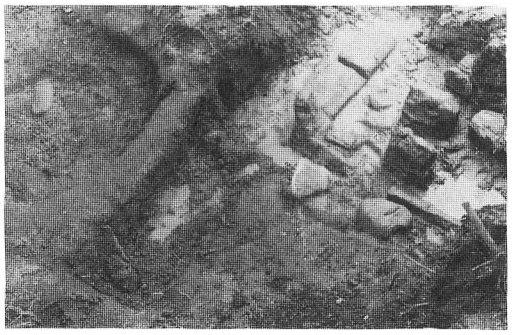
が後のつけ足しであることと合わせて前者は2次的のものと考えられるに至った。これらの基壇石の外方並に上方には矢張土器包含層が接しており，この土器包含層中にも少量の瓦を含んでいることも中軸線付近で見たのと同様であった。

中門北側では，中軸線近くには凝灰岩基壇石列は残されておらず漸く土壇の端肩に灰其他焼跡の土を思わせるものが付着した壇端らしいものが認められ，その外には瓦を含んだ帯青色の砂層がありここに溝が設けられていたことが察せられた。この辺の床土は緑色を帯んだ粘土層の上にバラスの敷かれたもので，その粘土層の下は砂混りの帯青色腐触土層となること，南大門の前面東よりで掘った場合とよく似ていた。尚ここには避雷針の銅燃線や水樋等が通っていて，様相を一層複雑にしていた。

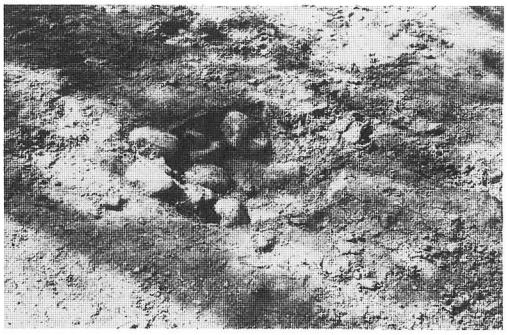
この北側も西方は池に掘下げられたことがあるので調査不能であるから，最後に中門東北隅を検討することとし，この部のつつじの樹を移植して，その発掘を続ける。始め南方の折返し位置で土質の変化をたよりに見当づけて行ったが，既に攪乱されていて判明せず，やがて中門東側基壇石並に回廊北側基壇石の一部が現れたので格好がついた。但し前者は南側で見たように石が立てられていないので，元のままでないかも知れない。付近には他に凝灰岩や玉石が相当散乱していた（第12図）。

中門礎石据付跡発見の端緒は，中門壇上に凝灰岩断片が散乱しているので，これを旧舗装用のものと推定してその表面を露出していた際，焼瓦，灰等の汚物の固っている所が見出され，これを追って除いて行くと手頃な穴が出来たことであった。かくしてこれを注意して掘って行くと，その底から礎石下詰石らしい石が出たので，これを順次探したのである。何れも汚い土が見出されて，それが緒となり，中には根石の夥しく残っていて，極めて明瞭なものもあったが（第13図），東端列の南端のもの等は最初に取付いた端の柱位置上，緒をはっきり捉え得ないため，困難を極めた。

最後に二三の問題が残された。第一は南大門と六条大路との関係である。興福寺の場合のように南大門から東西へ少し離れてから，築地が南折して道路が南方へ追いやられるか，それとも門が大路へ前半を突出するものかを知る必要を感じたのである。それには南大門から興福寺の場合のように東西に離れた場所を試掘してみることとした。南大門中心から136.5尺西方が丁度小さい門のある場所であるが，興福寺の築地の南折する地点も南大門中心から140尺程であるから，ここで道路と門の間を試掘してみると，果して幅4尺程に玉石を敷詰めたものが，深く旧床面上から現れたのである。これが築地下の石敷の名残であるとすればそのものずばり



第12図　中門東北隅で出た基壇石及び柱礎石据付跡（左端）



第13図　中門中列東より第3礎石据付跡

であるが，道路の舗装かも知れない。尚これを道路南の畠中で探してみると，所々欠損はしているが，ずっと南の川堤の手前まで続いている。（提の手前で土管が埋設されていた。）念のため，これと対称の東方でも道路南で試掘してみたが，ここは粘土の天然層が実に深く，地下11尺に及んでもなくならないので遂にこれを放棄した。一方小門の内部並に門の下を掘ってみると，門内にも同じ石敷が続き，これに対し，現門下にも元の門の基壇と見られるものが現れたので，これらの石敷は通路の舗装であると判定されるに至った。

第二は，『縁起』の南大門及び中門の寸尺に於て，梁行寸尺は今回発掘のものと正しく一致するのに桁行寸尺が会わない点である。但し中門の桁行51尺というのは正に中央3間分に当るし，南大門の50尺というのは，中央間の柱間寸尺18尺に隅の柱間16尺を加えた値である。だから両門は後に改造縮少されて，縁起の寸尺に改められたのではなかろうかという疑問が起る。然も中門では玉石で囲れて前面階段の輪郭らしいもの（両側には凝灰岩切石をおく）が正に1間分あって，門を3間に縮少したとすれば話が合う。そこで今一度そうした縮少の形跡は認められないが念をおしてみることとした。そこで先ず一つ起った疑問は中門で基壇の築土中から瓦片が出たり，又壇表より下方と見られる所に凝灰岩を混じていることである。南大門にはそうした疑問はないが，念のため，東北隅柱礎石跡とその両隣の礎石跡との間にトレンチを入れて，ここに雨落溝の形跡でもないか，しらべてみた。全然手答えがない。そこで試みに壇を掘割ってみるに，壇側と壇の上面は一様の粘土層でその中には瓦も混じており，（何れも上代の瓦片で水平におかれる）2尺以上も下ると，細かい砂利を混じた固い層となり，南方に向って稍上っている。そうすれば瓦の混入は創建当初からと見られよう。

中門では中央間だけ，後に地上げしてはいないかとの憶測を以てこれをしらべた。土壇の表面のみでなく中段にも凝灰岩片のあることは，注意を要し，東端間中柱通辺から南方に亘っても，中段に凝灰岩片が線状に存在するのが認められたが，これらは同一水位にあり，板石の中がぬけて，周囲が残されたものと見られるので，元はここに一面に凝灰岩が敷かれていたように考えられた。然もその石の上面は，東南隅基壇石の上面に相当する位の高さであったと推定される。そこで先に発掘した礎石据付跡の下に更に一段と低い古い礎石据付痕跡をさぐりあて得ないかと思い試みたが，これは無駄であった。こうして尚割切れぬ点も多少残ったのであるが，この辺で一応調査を打切ったのである。

3　遺跡に関する考察

平面の規模

平面寸尺の決定方法は大安寺で行った場合と同様であるが，中軸線については，東西両塔間の距離の2等分点から（西塔は擦礎による）両塔中心を結ぶ線に垂直な線を作ると，それは南門の中心を通らずして（南門は南大門遺跡の中心にあり）1.07尺東方に来る。又南門中心から南大門基壇布石の線に垂線を作った所，両塔を結ぶ中心は通らずに1.99尺西方に落ちる。よって図の中軸線は南大門基壇の線とは直角とせず，南門中心と両塔を結ぶ線の中心を結んだものとした。この線は幸い，中門の中列柱間の中心を通るのである。中門は西端が失われているので東半に従ってこれを決めた。旧尺の一尺は現尺の .975とした。これは東塔の実測値によったものである。

南大門　桁行5間中央3間各18尺両端16尺　梁行2間各16尺

中　門　桁行5間中央3間各17尺両端15尺　梁行2間各12.5尺

基壇の大きさは，（南大門は地覆石外面の線，中門は壇石の外面による）

南大門　東西110.96尺　南北57.13尺

中　門　東西 91.0 尺　南北43.22尺

南大門中門間心々　87.38尺

南大門階段の幅は54.5尺，従って軒出の下限は

南大門　平で14.135尺　妻で14.725尺

中　門　　9.4225尺　　6.0125尺

南大門は恐らく15尺以上の軒出を持った入母屋造，従って手先の多い斗栱を持ち，中門は軒出9.5尺以上，傍軒の出6尺以上で，切妻造，手先のない斗栱を持ったであろう。

現在の地盤は南門付近で著しく高く，中門遺跡付近では遙かに低く，2尺余り下っている。これは元々南大門基壇が中門基壇に比して著しく高かったのに基因し，礎石据付跡から知られるように，現南大門跡の地表は中門跡の地表よりもずっと余計に削り取られているのに拘らず，尚そのように高いのである。壇外の旧地表は，現南門付近の最高点よりも5尺程下になる。南面階段の出が4.8尺程あることから推して，石階は5級を下らず南大門壇の高は大安寺南大門と同様5尺程に及んだのでないかと思われる。中門の壇の高は変更を受けていて複雑だが，南大門よりは遙かに低く，現状から推すとその半分位であったかと察せられる（礎石跡から推すと壇表は削られていないらしい）。

南大門の基壇の構造は大安寺の南大門，中門と同様であるが，地覆に束枘を存しない点が異なり，石の大きさは，布石の見付幅は復原尺の1.2尺と見られ，（実際の大きさは1.4尺位）高さは復原尺の1尺に近い。地覆は幅1.4尺高1.00尺程で，何れも大安寺のものより大きい。築地際の束の見付幅は1.28尺～1.35尺～1.42尺，同厚 .52尺～ .55尺～ .62尺側面後部を欠取り，羽目石と相欠きになって納る。

中門基壇の構造は全く異なり，地覆も布石もなく，厚6，7寸の凝灰岩が地上に直接又はその下に玉石をかって立ち，その上に葛石をおいたものらしい。葛石は現存せず，唯一ヶ所にそれらしいものの載った所があったが，これは原形のままでなく，下の石が少しくずれた上に載せられたもののようであった。但し回廊南側のものは南大門の地覆と同形式のもので，凸字形の断面を持ち，羽目石はこの上方の突起と前面合はせに納り，前上角に欠込みがあって葛石を咬み合わせたようであり（その有効高は3寸）その地覆の上端が，中門基壇石の底と略一致している。従って回廊基壇は原初のものを残すと見られるが中門のものは全部やり直しているものと思われる。壇の中段に見られる凝灰岩片は，元の敷石のすり減った残片と見るべく，第二次には回廊壇上が中門より一段低くされているが，元は中門と同じレベルであったのであろう。その程度なれば中段の石の高さと一致する。第2次には壇外も前記のように土器包含土で埋立て，その上に粘土をおいたであろうから，南大門でも地覆外の布石は埋ってしまい，この中門の基壇石底も土中に埋って支えられたであろう。然しその時も階段耳石らしいものが中央3間分の外に存在することからすると，矢張3間の階段で，門は5間であったであろう。（但し前記のように背面東北隅東側に見出された凝灰岩は立てられず，横にねせて用いてあった。後に倒されたものか，

或は異った方式で石が積重ねられていたのであろう。何れにしても位置は適当な所にある。)

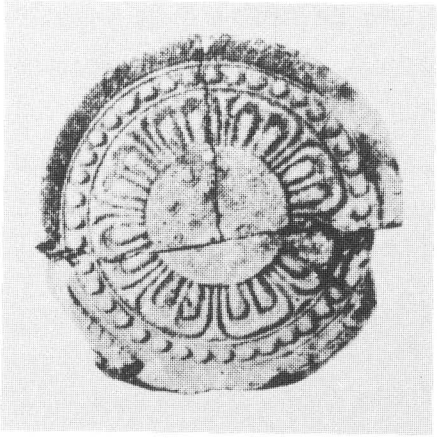
其後階段を正面1間に改造したのであろうか，南側中央1間両脇には凝灰岩布石も見出され，又丁度1間分の階段らしい位置を囲って玉石が列っている。尚二次的な南側基壇の外方3，4尺をへだてて玉石がならび，基壇東南隅では壇につれて北折し，更に回廊の基壇にそって東折している。これは側面で幅が減じてはいるが雨落溝の如きものの岸積であろうか。尚回廊南にはこの溝の蓋のような凝灰岩板石が存在する（第11図)。

これらの玉石の下には，中門南正面中央間の辺では凝灰岩布石が2条程，更に南方では，幅の広い路面を舗装した凝灰岩の板石かと思われる幅の広いものが，極めて薄くなって存在していた（作業困難のためこれを追及し得なかったのは遺憾であった)。これらはその高さから云っても原初のものと見られ，壇に近い部分のものは階段段石の名残かと思われる。

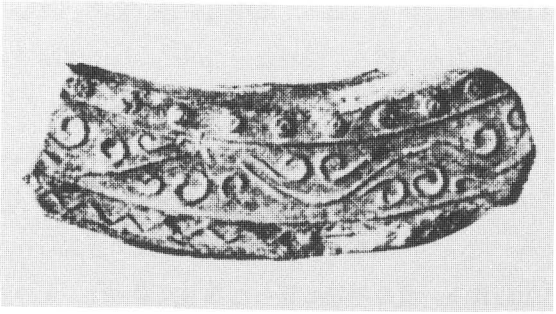
南大門中心より西方140尺（復原尺）を距てて現在小門のある位置には早くから小門があり，幅4尺余の石敷の路が南方川の堤に達している。これは南大門等の原地盤と続くものであるから，建立当初から存在していたものかも知れない。小門の地盤は石段一段だけ高くされている。

4　出土遺物について

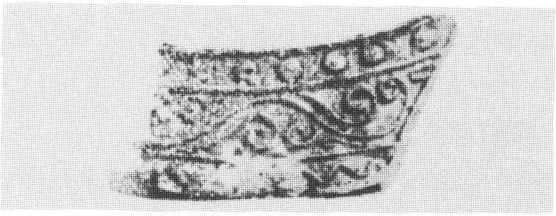
出土品は瓦の他は小量の釘，銅金具，古銭，土器，陶器等である。土器としては埋土中に多量に投入された土師の皿の破片があるが，須恵器は全然出ていない。瓦も自然に軒から落下したままの状態で現れたものはなく，何れも埋土中に混入されたものであるから，必ずしも出土地に深い意味は認め難い。出土瓦の文様の積類は円瓦27種，平瓦29種，同種で2個以上出たのは円瓦で7種，平瓦14種，時代は奈良より室町時代に及んでいる。更に5個以上出ているのは円瓦で3種，平瓦で5種である。この内には平瓦に平安時代のもの1種を含むが，他は奈良時代に属する。最も多数出土し，重要なものは，図示の3種であるが（第14，第15，第16図）平瓦の2種も同系統の文様であり，他にこれと類似のものが今1種あり（以上3種合わせて54個出土）円瓦の方も図示のものと似て稍調子の異ったものがある（図示のようなもの1個のみ出土，合わせて13個となる)。これらが創建当時の瓦であろう。尚中門礎石跡から室町時代以後の新しい瓦が出



第14図　建立当初の円瓦と推定される瓦当



第15図　建立当初の平瓦に擬せられる瓦当



第16図　建立当初の平瓦に擬せられる瓦当（その2）

ているのは，礎石抜取後埋ったものであるが，ここから図示の円瓦と同系統のものが4個も出ていることは看過し難く，当初から混じたと見られないこともないが，或は地上げに伴って礎石を多少あげたのではないかを思わせる。若しそのような工事をしたとしたら，これは建物が焼失乃至転倒して再建した際でなければならない。文献によって知られるものを擬するなれば，天禄4年の火災の後か，正平16年地震による転倒後があげられようが，これと関連した基壇に凝灰岩を用いていることや創建時の瓦が埋っていることなどから推すと，むしろ天禄焼失後に擬すべきであろう。

5 結　び

薬師寺伽藍の規模については，尚多く検討すべき問題を残しており，回廊，講堂等の位置，大きさ等に関しても，発掘調査に期待されるのであるが，今回その第一着手として，南大門及び中門の位置，大きさ其他を明らかにし得たことは喜びにたえない。特に縁起の記載と桁行寸尺を甚だしく異にしていたことは予想外の収獲で，弥発掘によって，全伽藍規模が明確にされることの必要を痛感させられる次第である。尚中門基壇が創建当時のままでなく，改築されていることが察せられるに至ったことも薬師寺建築の歴史に示唆を与えるものである。

又南大門の規模が，金堂が比較的小規模で柱間寸尺も小さいのに拘らず，大安寺の南大門に匹敵する大建築で，大柱間を持つことが明らかになった如き，奈良時代の建築を考える上にも大きい反省を促すものであった。中門は流石に大安寺のものよりも梁行に於て著しく小さいが，これは回廊が単廊であったか否かを明らかにされる時が来れば，一層問題が鮮明になるであろう。

尚南大門は築地を中心にして，前半を築地外に出していることは大安寺の場合と同一であることがはっきりしたのであるが，六条大路はこの築地外に接していたのであるか，或は更に南方によっていたものであるか等の問題が残る。西方小門前で発掘された石敷はこれを解決するかに見えたが，結局単なる通路となって，これのみでは判定のしようがない。これは他日の問題として別な方法によって解決する工夫がなされなければならぬこととなった。

その他南大門の南東で出た掘立柱穴の如きものについても他日追求する必要があるが，薬師寺の創立前の地盤についても，深く掘下げた南大門南側や中門北側で知られたのによると，深い砂や粘土の腐触土であったらしく，その上に人工的に粘土を敷き，バラスを入れているようである。又南大門中心から東方140尺付近でみたように，天然層が地下11尺に及んでもなくならないことは，天然地形に相当高低のあったことを示唆するもので，創建当初の立地条件についても，将来これを解明する必要を感じさせられる。